「がん哲学外来」八戸に来月開設

専門職・市民有志　月1回運営

不安、苦しみ…耳傾け　じっくり対話

患者・家族　心の支えに

5月に開設する「がん哲学外来」の打ち合わせを行うスタッフたち

がんになった不安や苦しみ、がんとの向き合い方を患者や家族と一緒に考える「がん哲学外来」が五月十七日から毎月一回、八戸市に開設される。がんについて自由に語り合い、相談に乗る窓口として、医療・福祉関係の専門職やカウンセラー養成講座を修了した市民有志ら十数人がボランティアで運営する。スタッフは「がんになった事実を受け止められず沈んでいる人たちの心の支えになりたい」と話している。

「がん哲学外来」は順天堂大学の樋野興夫教授が提唱した。二〇〇八年一―三月の五日間、同大学で開設したところ、予約が殺到した。出前講義の依頼が相次ぎ、全国各地で開設の動きが出始めている。

八戸市では、研修やカウンセリングを行う「ライフデザイン総合研究所」（本社・八戸市）社長の高橋育子さん、榊原明美さんの臨床心理士二人を中心に昨夏から準備。今年二月に同市内で開いた樋野教授の講演会には定員いっぱいの約二百三十人が参加、関心の高さをうかがわせた。

相談は医師、臨床心理士、カウンセラー養成講座修了の市民らで構成するスタッフが担当。樋野教授が運営を支援する。

スタッフの中にも家族ががん患者という人は多い。夫が闘病七年目の女性は「カウンセリングを学んだおかげで夫のがんを冷静に受け止められた。自分の経験を役立てたい」と語る。

また、夫をがんで亡くしたという女性は「四年間の闘病生活中、私の心も傷つきガタガタになった」、母を亡くした女性は「治療方法をめぐり自分の判断が正しかったのか、ずっと悩んだ」と振り返り、「患者・家族の力になりたい」と口をそろえる。

八戸でのがん哲学外来の代表を務める高橋さんは「病院の主治医は忙しく、じっくり耳を傾ける時間がない。家族や仕事のこと、生き方についてゆっくり話す場を提供し、支え合える関係をつくりたい」と話している。

がん哲学外来は第三日曜日、種差海岸近くの「すなおクリニック」（八戸市鮫町、吉田淳院長）内に開設する。五月十七日は午後一―四時で一人五十分程度。無料だが運営協力費一口千円以上を募る。事前予約が必要。電子メール（hachitetsu@pomr.jp）か、ライフデザイン総合研究所（電話〇178㊝5510、月・火・木曜の午前十時―午後六時）へ。